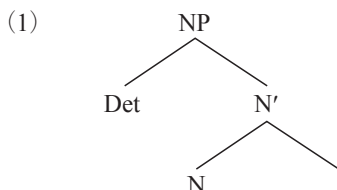


## 27 DP仮説

Abney (1987) によって提案された仮説で、従来Xバー式型 (X-bar schema) に従っていなかった決定詞をXバー式型に当てはめ、**決定詞句 (Determiner phrase, DP)** を提案し、**Xバー理論 (X-bar theory)** を拡張した。一般に**DP仮説 (DP hypothesis)** と呼ばれる。

Chomsky (1970) によってXバー理論が提案された当初、決定詞は(1)のようにNP指定部を占める要素に過ぎなかった。



(1)の構造には、いくつかの理論的・経験的問題がある。まず、Detは明らかにXバー式型に従っていない。Xバー理論が普遍文法 (Universal Grammar, UG) の一部を形成しているのであれば、DetもXバー式型に従うはずである。

また、名詞句内での一致 (Agreement) 現象もうまく説明できない。文IPではIP指定部の主語がその主要部Iを介して動詞と一致するが、同様の一致現象がトルコ語の名詞句内でも見られる。(2a)に属格要素を加えた(2b, c)では、属格要素と主要部名詞が一致している。

(2) a. el

“the/a hand”

b. sen-in el-in

you-GEN hand-2sg

“your hand”

c. on-un el-i

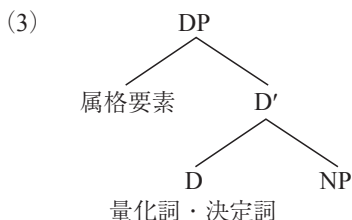
he-GEN hand-3sg

“his hand”

(cited in Abney 1987: 21, Underhill 1976: 92)

(2)の一致現象を説明するためには、名詞句内にも一致要素が必要である。

これらの問題を解決するため、AbneyはDPを提案している。DP仮説によると、名詞句の構造(の一部)は(3)のように示される。指定部にはJohn'sのような属格要素が、主要部にはeveryのような量化詞 (quantifier) やtheのような決定詞が現れると仮定されている。



(3) はXバー式型に従った構造であり、すべての句がXバー式型に従った構造でなければならないという理論的問題を解決できる。また、主要部Dに一致素性を仮定することで(2)の一致現象も説明できる。すなわち、DP指定部の属格要素は、主要部Dを介してその補部の名詞と一致すると説明される。さらに、DP仮説により、文と名詞句の平行性も捉えられる。文は機能範疇(I)と語彙範疇(V)から形成されるが、名詞句も機能範疇(D)と語彙範疇(N)から形成されることとなり、両者を平行的に分析できる。

なお、DP仮説を採用することにより、従来のNバー削除(N-bar deletion)はNP削除として捉え直される。Nバー削除とは、(4)のように属格要素を残してそれ以外の部分が省略される現象である。

(4) Lincoln's portrait didn't please me as much as Wilson's.

(4)では、属格要素であるWilson'sを残して主要部名詞portraitが省略されている。

従来、この現象はNバー削除として知られており、(5)のように文字どおりN'を削除することで派生されると考えられていた。(5)のeは省略箇所を示す。

(5) Lincoln's portrait didn't please me as much as [NP Wilson's [N' e]]

(Saito and Murasugi 1990: 286)

DP仮説の下では、属格要素はDP指定部に現れるため、省略箇所はNPとなる。このことを(6)に示す。

(6) Lincoln's portrait didn't please me as much as [DP Wilson's D [NP e]]

以上のように、DP仮説は理論的にも経験的にも興味深い仮説であり、現在広く採用されている。また、省略現象をはじめとしたその後の多くの研究に大きな影響を与えている。ただし、Chomsky (2007, 2013)はDP仮説を妥当ではないと述べている。

(佐藤 亮輔)